

十年を振り返って

沖縄県公文書館における保存修復業務について

大湾ゆかり†

はじめに

- 1 保存修復業務の概要
- 2 琉球政府文書に関する調査
- 3 岸文庫古文書・古典籍資料等の修復
- 4 現在着手している作業について

おわりに

はじめに

沖縄県公文書館が開館して10年の歳月が経過した。開館当初より、県民の大切な財産を守るという責任の重い仕事に就かせていただき、これまで何をするにも勉強の毎日であったが、幸い良き指導者に恵まれ、また暖かい先輩方の励ましに支えられて今日まで来た。少し年を重ねたのは職員だけでなく、公文書館自体もこの10年の間に随分成長したように思う。ガランとしていた書庫も資料に埋め尽くされ、来館者の数も伸び、公文書館の知名度も高まって今では多くの人々に利用されている。それに呼応するかのように、ますます資料の保存業務も重要になってきた。利用者のニーズに応えられるよう、所蔵資料の一つ一つを健全に保存し、利用できるようにすること、それが我々に求められている。

10年経ち、まだまだたくさんの資料に手をつけられずにはいるものの、平成7年5月15日に沖縄県立図書館史料編集室より正式に移管された琉球政府文書については、16万簿冊余の膨大な資料群に対して調査段階を経て本格的に保存措置に取り組むことになった。また、岸秋正文庫に含まれる古文書・古典籍資料の修復やマイクロ撮影も終了し、戦前の公文書や私文書、雑誌類、地図等の保存手当等も行ってきた。そこで、この機会にこの場を借りて筆者が担当した沖縄県公文書館の保存修復業務についてまとめて報告し、これからの保存業務の展望を述べてみることにする。

1 保存修復業務の概要

資料保存業務とは、資料保存機関がそれぞれに所蔵する資料について、現在及び将来の利用を保証するために行われる業務である。沖縄県公文書館におけるこれらの業務の内容を大きく分けると、まず搬入された資料の燻蒸処理、保管されている書庫の管理、マイクロ撮影等の複製、さらには修復や保存措置に関する業務となる。

当館が開館した当時、これらの業務は筆者の担当となり、他の専門員や嘱託員と協同し

† 財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部修復士

て手順や方法を検討しながら作業を進めた。平成10年にマイクロ撮影を担当する専門員が採用されたのを機に複製業務は保存修復業務と分離し、筆者は主として燻蒸、書庫管理、修復保存の各業務に力を入れられるようになった。そこで、ここでは筆者が担当するこの3つの業務について概要を説明する。

(1) 燻蒸処理

当館では、平成7年に琉球政府文書をはじめ多くの資料が搬入されたので、書庫燻蒸を計3回実施した。以来、平成11年まで毎年1回ずつ書庫燻蒸を行っていたが、大量の薬剤使用に伴う環境への影響や燻蒸時における湿度の急激な変化、さらに青焼き資料と燻蒸剤とが反応して生じる悪臭等の問題により、平成12年から書庫燻蒸は行わないこととなった。代わりに新しく搬入される資料の初発燻蒸を徹底することにし、平成16年度末までに館内の燻蒸設備で行った燻蒸処理は191回。また、毎年1回大量の県文書が運び込まれる時期には、当館の燻蒸庫では対応できないので那覇青果組合の倉庫を借り、平成16年度までに計12回燻蒸処理を実施した。

当館で使用していた薬剤は、平成7年の第1回目の燻蒸のみブンガノン、残りはほとんどエキボンである。この薬剤は、周知の通り平成16年末で製造が中止となり17年からは使用できなくなった¹。そこで、当館では平成13年度頃から代替法に関する資料収集及び調査を開始し、平成15年度には本格的に館内で協議を始めた。これまでのように他の薬剤を使って燻蒸するか、それともこの機会に薬剤を用いない方法に切り替えるかで議論が繰り返された。代替法にもいろいろな方法があるので、それらを比較し各々の利点や欠点をまとめ、切替時に必要となる経費やランニングコストの算定、作業工程や作業量の予測等、様々な資料を作成した。これを元に何度か議論を重ねている間にも、館内では度々虫やカビの問題が発生し、その対策に追われていた。やはり薬剤燻蒸でなければならないだろうか、一時そのようなことも考えた。

その頃、独立行政法人東京文化財研究所で定期的にかかれた臭化メチル全廃後の代替法やIPM²に関連した研究会に筆者も参加した。この研究会では、臭化メチルに代わる燻蒸剤やその事例、薬剤による危険性等も報告された。そして、何よりこれからの害虫管理が環境管理を重視した方法へと転換しつつあることを学んだ。これまでのように薬剤に頼ることなく、資料を取り巻く環境整備に努めなければならないことを痛感したのである。同時に、館内では環境にも人体にも影響のない方法を選択したいという職員の要望もあり、長期的にみても従来の燻蒸釜を改良して薬剤を使用しないで行える方法に切り替えることへ意見が集約されていった。

こうして、非薬剤処理³のどの方法を採用するか具体的な検討に入り、他館の状況等も調査した結果、平成16年には低酸素濃度処理法の導入がほぼ決まり、それに伴う予算獲得を行うと同時に取扱業者の調査や実作業のシュミレーション等を実施した。最終的に当館

¹ 従来使用していたエキボンは、臭化メチル及び酸化エチレンの混合剤。このうち臭化メチルがオゾン層破壊物質であることから、モントリオール議定書により先進国は検疫以外では2005年に全廃することが決定された。

² Integrated Pest Management =総合的有害生物管理

³ 非薬剤処理として、低酸素濃度処理、高温処理、低温処理、二酸化炭素処理等がある。

の燻蒸釜に適応する方式で窒素ガスを発生させる装置の開発業者を選定し、当年これまでの燻蒸施設の一部を撤去して当該機器を設置した。

この処理方法を選択したことにより殺虫処理には約3週間を要することになったが、その分資料のクリーニング等を強化して燻蒸する必要のある資料のみ処理するよう体制を整える予定である。さらに、初発燻蒸できない資料もでてくるので、これまで以上に環境整備に努めなければならない。このような手間が生じはするものの、作業員や資料に対して影響なく安心して殺虫処理が行える現方式を導入できたことは本当に良かったと思う。また、薬剤燻蒸ではガスの投薬作業は業者委託であったが、これからは職員が誰でも対応できるのでコスト削減にも繋がるであろう。まだ稼働し始めた段階ではあるが、将来的にもIPMにつなげる第一歩になるものと期待している。

〈資料の流れ〉

従来：資料の搬入 → 燻蒸処理（薬剤） → 中間書庫（選別・整理待ち） → 保存庫

今後：資料の搬入 → 点検・クリーニング → 低酸素濃度処理（必要な資料のみ） → 保存庫

県文書の搬入 → 中間書庫 → 低酸素濃度処理（選別後保存する資料のみ） → 保存庫

(2) 書庫管理や環境管理

この10年間で最も多くの時間を費やしてきたのが書庫管理をはじめとする環境管理業務であった。というのも、当館の建物内においては書庫や各室の温度差が大きく、湿度の高い日には作業部屋をつなぐ廊下や天井が結露し、カビの温床になることもしばしば。その度に清掃する日々が続いた。こうした状況は、閲覧室や展示室、あるいは書庫の内廊下等でも起こった。たとえば、展示室ではケースの中の展示台にカビが発生したこともある。各書庫をつなぐ廊下は、とくにフィルム保管庫の入り口付近が結露してカビが生えた。事務室や隣接する職員用の資料室等にも発生する。幸い資料に大きなダメージを与えることなくカビを除去したが、展示室、書庫、作業部屋等全ての場所で何らかの対策が必要であった。

そこで、筆者らは書庫に温湿度データロガーを設置し、空調機の日常データと照合して誤差を割り出すとともに、毎月のデータを集積した結果をみて施設管理担当者に不具合を報告。そこから業者へ連絡がいき、調整するという体制を敷いた。つぎに、廊下や作業部屋等の結露を解消するため小型除湿器を設置し、毎日の温湿度計や除湿量等を測定した。これらのデータを元に施設担当者や建築設計業者と協議した結果、各室の温度差を極力均一にするため施設の改修工事が行われ、結露は改善された。

また、今年度はカビの除去作業を専門業者に委託し、初めて天井面内部にまで沈着していたカビまで除去、滅菌や染みついた面の塗装等も行った。こうして、ようやく夏場湿度が高い時期にもカビの発生をごくわずかに抑えることができたのである。この他、展示室や書庫の内廊下等にも除湿器の設置や空調設備の改良等を行い、今ではそれぞれに安定した環境が保たれている。

書庫管理ではもう1つ重要なことに衛生管理がある。当館では書庫の清掃は2ヵ月に1回の割合で行っている。しかしながら、通常の清掃では床面に限られているため、書架の棚上等に埃が積もっている場合もある。これまでは特別整理期間の作業時にできる範囲で職員自ら清掃してきたが、次年度には大がかりな清掃業務を委託する予定である。また、

虫のモニタリングとして各書庫にはトラップを仕掛けて点検することも行ってみた。結果的には虫はほとんど発見できなかったが、これからも継続的に見ていこうと考えている。

この他の業務として、職員共用の場である書庫における利用基準を作り、各書庫の配架状況を毎年点検して、分類の異なる資料群の大きなゾーニングをし、県文書、行政刊行物、地域資料等、種類別に資料の配架位置を指示、掲示板等の作成するなど、利用しやすいように工夫している。また、他機関から預かった資料の管理や展示ケースの改良工事等も行っている。

以上のように、書庫をはじめ館内の環境管理について様々な業務を紹介した。先述の通り、当館では温湿度の不具合から結露が生じ、カビを発生させるなどの大問題があったが、それらもこれまでに改善の途をたどっている。しかしながら、館の外回りを見ると、まだまだ沢山の問題を抱えている。中でもヤスデやアリ等の大量発生、鳥の巣による汚損状況は、頭の痛い問題である。そこで、蛇足ではあるがこれらの状況と対策について付け加えておくことにする。

①ヤスデ

公文書館の敷地に時期になると大量のヤスデ⁴が発生する。とくに平成13年には当館の建物周りはすべてヤスデに覆われているような状態といっても過言ではなかった。このときには毎日大きなビニル袋の3～4袋が掃き集められ、翌日にはまた元のようになっている状態であった。

ヤスデの対策としては県環境衛生研究所及び県南部保険事務所、南風原町等とともに発生原因究明のための調査を実施し、対策を検討した。そして、施設周辺の雑木等を取り払い、薬剤を散布するなどの対策を講じた。

②アリ

3年程前から燻蒸室内に大量のアリ⁵が発生した。それ以外の場所には見られなかったもので燻蒸室に何らかの原因があるものと考え清掃を強化したが、とりわけ大雨の後に壁と床の隙間からたくさんのアリが這い出してくる。筆者等は毎日のように殺虫剤をまき、掃き掃除に明け暮れた。それでも改善の兆しが見られず、原因究明のため業者に調査を依頼した。その結果、1階部分の花壇に使用されていた添え木（枯れた竹）や地中にアリの巣があることが判明したので、その部分に薬剤散布した。

このような処置である程度のアリの侵入は抑えられたが、完全にいなくなったのは、燻蒸釜の改良工事を行いエキボン仕様の燻蒸装置を撤去した後であった。なぜ、装置撤去後にアリが全く出なくなったのか因果関係は不明だが、エキボンを使用しているときは部屋にも独特の臭いがあり、アリを誘引する物質が残っていたのではないかと推測している。

③鳥

沖縄県公文書館は建築の段階から亜熱帯の気候を考慮して様々な工夫が凝らされた建物である。その特徴の一つがルーバーと呼ばれる管理棟の書庫周りを取り囲むコンクリート製の花柄レンガである。ルーバーは、厳しい直射日光を遮り、風の流通を促す役目を果たして書庫の外界から受ける環境を緩和させている。しかし、一方でルーバーは台風等の時

⁴ ヤンバルトサカヤスデ：1983年頃から発生し、瞬く間に沖縄島全域に分布を拡大した。

⁵ アシジロヒラフシアリ：2003年夏～2005年10月まで大量発生した。

でさえ格好の雨除け、風除けになるため、ハトやシロガシラ、イソヒヨドリ等の鳥にとって巣を作る最高の環境にもなってしまった。

春の陽気がさし始めると、早速巣作りに励む鳥たちが寄ってきて建物周辺に糞を落とし始める。小鳥が成長し始める頃にはカマキリ等の虫の食べ滓等がたくさん落ちてくる。このような状況を改善しようと、巣の撤去やルーバー内の清掃等を検討してきたが、建物の構造上実行するのは極めて難しく解決できないのが現状である。

このように温暖な気候の沖縄では、生物被害に対する対策は重大な問題である。薬剤燻蒸に頼らずに人や自然に優しい方法を推進していこうという中で、いかに虫たちと共存共栄していくかがこれからの課題であるが、そのためにはより一層周辺環境を整備し、館内において被害を受けやすい所から受けにくい所までエリアごとにレベルを決めて管理することを検討したいと考えている。

(3)修復保存処置

当館には修復作業等のために290平米の広さを有する製本補修室がある。この部屋には、大型備品としてリーフキャストマシンやプレス機、製本機、断裁機、軽印刷機等々、多種の機械類がある。これらの機器類の管理やメンテナンスをはじめ、部屋全体の管理も筆者の業務である。この他、修復等に要する材料や保存容器の発注・管理、整理や修復・マイクロ撮影等で一時的に持ち込まれる資料の管理等も行っている。

つぎに、修復保存処置には実際にどのような作業があるか説明しよう。主な作業は以下の通りである。

①調査

実際に修復する資料に対しては簿冊ごとに個別に詳細な劣化状態を記録し、資料群ごとに簡易な処理を大量かつ迅速に行うときには、リスト形式で調査シートを作成し、簡易な内容を記録している。

調査シートの記入の際には、紙の強度やpH等も測定するとともに、使われている材質を顕微鏡で確認したり、インク類の滲み具合を調べたり、また対象資料でとくに特徴的な劣化箇所等は随時写真撮影するなどして記録に残している。

②処置リストの作成

修復する資料については①の調査シートに処置内容も記録し、これらをまとめて「修復台帳」というデータベースを作成し検索できるようにした。

③保存容器の作成及びマイクロ撮影に伴う作業

容器に収納して保護するだけで良い資料には、保存箱やフォルダー、エンキャプスレーション⁶等の処置を行っている。これまでに、岸文庫の地図65件223枚、沖縄県対米請求権協会から寄贈された地図196枚等を脱酸処理し、伸展後にエンキャプスレーションした。また、土地所有申請書5,338冊は、開館当初から2～3年間かけて専用の弱アルカリ性保存箱を特別注文し、整理、マイクロ撮影後に収納した。岸文庫の古文書・古典籍資料には

⁶ 2枚のポリエステルフィルムに一枚物の資料を挟み、超音波ウェルダーマシンを用いてシールする方法。

帙を、戦前の大量な雑誌類にはブックケースを作成した。この他、マイクロ撮影が終わった資料の一部は紙焼きして複製本を作成している。

④保存処置（クリーニングや簡易補修）

クリーニング、金具類の除去や簡単な繕い等で十分な資料には簡易補修作業を行う。この作業は、通常は資料をぬらさない状態で破損部分の繕いや欠損部分の補填し、アイロン等を使って速乾燥させるものである。資料によっては、綴りが崩れたりマイクロ撮影のため解体する必要があるものもある。こうした資料は、解体後に簡易に綴を伸ばし、必要最小限の補修を施して綴じ直している。また、セロハンテープの除去や水分を含ませるフラットニング、ウェットクリーニング等も資料の状態を見ながら随時行い、近現代の酸性紙に対しては紙の劣化を遅らせるため脱酸処理している。

⑤修復

資料の紙力が極端に落ち、何らかの処置をしないと利用できない状態のものについては修復処置を行う。修復には虫損補修、裏打ち、リーフキャスト法⁷があり、各々の資料に見合った方法を選択する。リーフキャストによる修復は、墨のように水に動かないものを対象にしており、主に古文書や古典籍資料に適用している。近現代文書については、脱酸処理も兼ねて実施するため手修復による場合が多い。これらの処置をするときにも、できる限り厚みが出ないよう欠損部分だけの補填で事足りる場合はそれだけの処置に留め、紙力がかなり落ちたもののみ裏打ち等の処置を施している。

⑥修復委託

館内の設備あるいは技術等では処理できない資料には、県内の技術者に委託して修復したものがあつた。一方で軸装や扁額等の修理を外注し、他方、技術者を館内に招いて職員への技術指導も兼ねて修復する場合があつた。主な資料としては『首里那覇鳥瞰図』（軸装）や『東恩納寛淳書簡』（扁額）、『夏姓家譜』等家譜、辞令書、『琉球人行列之図』（軸装）等の古文書類を処置した。

また、この3年間は琉球政府文書のマイクロ撮影に伴い、文書に含まれる写真や紙同士がくっついて剥離できないものを委託して修復した。これらは緊急性のあるものばかりなので、今年度からプロジェクト化して取り組み始めている。

⑦資料保存講習会と資料保存講演会

当館では、平成8年度から毎年資料保存講習会を開催し、また平成7年度から15年度までは県内外から修復や保存分野の専門家をお招きして講演会を開催した。講習会では、当館の業務紹介とともに、一般家庭や職場で活用できるよう箱の作成や修復・製本等を実習し、講演会ではより高度な技術を紹介したり、できる限り多くの方々に資料保存の考え方を普及させる目的でシンポジウムを開催した。

⁷ 拡散させた紙の繊維をリーフキャストマシンを用いて紙の欠損部分に漉き込む方法。

これまでに実施した資料保存講習会一覧

年度	テーマ	開催日
平成 8年度	開館一周年記念事業「保存箱教室」	1996/8/4(2回)
9年度	第2回「保存箱教室」	1997/8/10・8/24
10年度	「和本の製本と保存箱」	1998/8/8・8/9
11年度	「無線綴じ本の簡易製本」	1999/6/19
12年度	「貴重資料を保存容器でまもる」	2001/1/20
13年度	「和装製本と保存箱作成」	2001/8/10
14年度	「紙資料のクリーニングと簡易補修」	2002/8/16・10/4
15年度	「保存箱とエンキャプスレーション」	2003/8/14
16年度	「無線綴じ本の簡易製本」	2004/8/12
17年度	「資料のクリーニングと防虫対策」	2005/8/10

これまでに実施した資料保存講演会一覧

年度	テーマ	講師	開催日
平成 7年度	「簡易製本と保存容器の作成について」	大竹茂 (国立国会図書館)	1996/1/24
9年度	「図書の補修と製本」	大山清二・丸澤勝利 (国立国会図書館)	1998/1/20
10年度	「県内における資料保存の現状と課題を考える」	青木睦 (国文学研究資料館史料館) 上江洲敏夫 (具志川市立図書館) A.P.ジェンキンス (沖縄県公文書館)	2000/3/1
11年度	「洋紙資料の保存と修復-酸性紙をどうするか-」	金山正子 ((財)元興寺文化財研究所)	2001/2/18
12年度	「資料保存の新展開-国際化時代の展望-」	安江明夫 (国立国会図書館)	2002/2/24
13年度	「中近世文書の装幀と料紙及び修復・保存」	細井歌寿男 (宮内庁書陵部)	2003/1/18
14年度	「写真の保存について」	荒井宏子 (東京都写真美術館)	2004/1/24
15年度	「これからの記録史料の虫菌類対策について」	木川りか (東京文化財研究所)	2005/1/22

⑧出版物

資料保存講習会で配布した資料の集成版として『資料保存のしおり』を作成し、講習会の参加者をはじめ希望者に配布している。

⑨研修等

筆者はこれまでに修復技術の習得、向上のため様々な研修を受けさせていただいた。一番初めに研修したのは東京の国立国会図書館であり、ここではリーフキャストマシンを使った修復方法や和紙で欠損部を埋める虫損補修、洋装本の製本方法等を教示していただいた。また、平成11年度には、沖縄県人材育成財団の助成を受けて英国国立公文書館やエセックス州立公文書館、ランカシャー州立公文書館等で研修した。このときは、洋紙資料に関する保存修復処置について、ドキュメンテーションからクリーニング、諸々のテスト、フラットニング、リーフキャストニング、手修復まで全て実習しながら技術を習得し、さらに英国内の公文書館や博物館、図書館等を多数視察して、資料の保管方法や害虫管理、防災管理等について学ばせていただいた。

これらの研修は筆者にとって貴重な経験であり、その成果をもとに現在も業務を行っている。これからも修復技術等において先進県あるいは先進国の情報を積極的に集めて、技術力を高めていけるよう努力するとともに、研修等を通じて各国のコンサーバー達と交流を深めることができたので、これを十分活用していきたいと考えている。

以上、筆者が受け持つ保存修復業務の概要を述べた。日常的には、環境管理に費やす時間が全体の3分の1を占め、その他の時間を工夫して修復作業にあっているのが実状である。

そうした中で、琉球政府文書については、平成7年度から文書群全体の特徴をつかむために様々な調査を行ってきた。とくに利用頻度が高かった土地所有申請書については、県立図書館時代にすでに始まっていたマイクロ撮影を継続するとともに、当館でももっとも早く保存措置を講じた⁸。

また、戦前に作成された資料が極めて少ない沖縄県にとって、岸秋正氏が収集し、平成9年1月17日に当館に寄贈された資料群約11,000冊は沖縄の記録として非常に貴重なものである。これらのうち、とくに希少価値の高い古文書・古典籍資料については、優先的に修復及びマイクロ撮影を行い、原本の保護にあたった。さらに、同文書群に含まれる戦前の雑誌類約1,800冊は、独自にブックケースを作成して収納した。この他、『夏姓家譜』や新垣家文書、瀬底毛文書等の古文書類、戦前の新聞や地図類等、利用できない状態にまで劣化した資料について、その都度修復処置を施してきた。ちなみに、平成16年度末までに実施した修復保存措置は延べ4,259冊で、修復した資料数は延べ21,789枚となっている。



土地所有申請書
保存箱収納前(左)と収納後(右)

岸秋正文庫雑誌類の収納状況

『夏姓家譜』の修復前(左)後(右)

そこで、次章ではこの10年間でとくに重点的に行った琉球政府文書の調査、並びに岸文庫古文書・古典籍資料の修復について報告する。

2 琉球政府文書に関する調査

沖縄県公文書館の最大の資料群である琉球政府文書。これを将来にまで健全な状態で保存することは我々の責務である。したがって、この目標を常に念頭に置きつつこの10年間にいろいろな調査を行ってきた。開館年度より実施した調査の内容はつぎの通りである。

	年度	調査名	委託先
①	平成7年度	琉政文書の概要調査	(有)キャット
②	10年度	第1回利用状況調査	—
③	11年度	琉政文書に使用されている紙の繊維分析	高知県立紙産業技術センター
④	12年度	第2回利用状況調査	—
⑤	15年度	琉政文書素材調査	(財)元興寺文化財研究所
⑥	15年度	琉政文書の保存状態調査 ⁹	(株)りゅうせきビジネスサービス
	16年度	〃	(株)求人おきなわ

これらの調査は段階的に進められたもので、平成17年度から開始している「緊急保存措置事業」の基礎をなすものであった。琉球政府文書は何といても膨大な量と様々な形態

⁸ マイクロ撮影に合わせて整理し、各々の大きさや厚みに合った帙状の保存箱に収納した。

⁹ 琉球政府文書の保存状態調査は人材派遣業者に委託。調査の総括責任者に修復等の専門家をあて当館職員との協議しながら作業を進めた。

が保存計画を立てる上で妨げになっていた。数量の問題もさることながら、1冊ずつ形態が異なり大きさも綴り方法も紙の材質や使用された筆記類も違っている。そのようなものが本体だけでも15万冊分あるわけで、初めはどこから手をつければいいのか、正直なところ困惑していた。したがって、文書群の内容を把握することは、保存計画を立て実際に作業に移す上でも大切なことであった。

そこで、我々はまず調査の専門家に相談し、サンプリング調査によって琉球政府文書が物理的にどのような資料群か全体を把握することにした。この調査¹⁰では、同文書群の大凡の枚数、厚み、規格外簿冊の冊数、青焼きコピー紙の枚数、修復を要する簿冊数等の推定値を出すことができた。

つぎに、筆者は琉球政府文書のマイクロ撮影や修復処置を始めるためには、何を優先的に実施しなければならないだろうかと考え、その指標の一つとして利用状況を調査してみた。これは開館から3年間及び5年間分の閲覧のデータを集積し、簿冊1点ずつの利用回数等を析出すると同時に局課ごとの利用頻度を算定したものである。この結果¹¹、5年間で延べ19回も利用された簿冊が存在することが判明し、また特定の局課に利用頻度が高いことも立証された。とくに総務局総務課の文書は平均4.46回、次いで復帰対策室等の文書は2.21回利用されており、他に比較しても高い水準にあることがわかった。

つぎの段階は、琉球政府文書の素材に関する調査である。まず、文書を構成する紙材の繊維分析を試み、材質的にどういう特徴を持っているのか把握したが、それだけでは同文書群自体に生じている劣化原因が浮かび上がらなかったため、平成15年度には本格的な素材調査¹²を実施した。この調査では、紙及び筆記具等の種類や素材的特徴をより詳細に調べ、具体的な劣化要因を洗い出した。また、紙の経年劣化速度を実験して紙の持つ寿命を導びこうとした。結果的には紙の寿命はわからなかったが、どの種類の紙が最も劣化しやすいか、あるいは劣化要因とその対策についても詳しい報告を得ることができた。

最後に、これまでの調査を足がかりにして琉球政府文書15万簿冊の個々の保存状態調査¹³を実施した。この調査は、沖縄県緊急地域雇用創出特別事業によって実現したもので、その成果は将来にわたって琉球政府文書を保存していくための基礎資料として重要になるものと確信している。調査では、全ての文書について形態や大きさ、保存状態、青焼きや湿式コピー紙、ざら紙、トレーシングペーパー等を含む文書、あるいは虫食いやサビ、カビ等によって劣化した文書等を特定することができた。さらに、この情報は全てデータベース化され、どの簿冊がどのような状態か瞬時に把握できるようになった。

以上の調査結果をもとに、平成17年度には具体的な保存計画を立て、まずは強劣化資料及び強弱褪色の湿式コピー紙を含む資料から優先して修復やマイクロ撮影等の作業を開始している。

¹⁰ 「琉球政府文書群の概要調査について」『沖縄県公文書館研究紀要』創刊号、沖縄県公文書館（1998年）

¹¹ 「琉球政府文書の利用状況調査報告」『沖縄県公文書館研究紀要』第3号、沖縄県公文書館（2001年）

¹² 「琉球政府文書の現状と保存対策のこれから その2」『ARCHIVES』第29号、沖縄県公文書館（2005年）

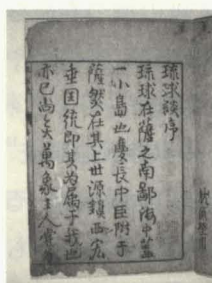
¹³ 「琉球政府文書の現状と保存対策のこれから その1」「同左 その3」『ARCHIVES』第28号&30号、沖縄県公文書館（2005年、2006年）

3 岸文庫古文書・古典籍資料等の修復

平成9年1月17日、岸朝子氏より亡夫、岸秋正氏の蔵書が当館へ寄贈された。これを記念して平成9年8月には特別展「沖縄へのまなざしー岸秋正文庫の世界」と題した展示会を開催し、寄贈された11,000冊余の中から448点が紹介された。中でもほぼ琉球王朝時代に作成された古文書・古典籍資料126点は、同時期の資料に乏しい沖縄県にとって貴重な資料であった。

そこで、当館では展示会終了後すぐにこれらの資料のマイクロ撮影を計画し、それに伴って解体を要する資料や保存状態の悪い資料について修復処置を施すことになった。これらの中には軸装の書画や絵巻物等も含まれていたため一部は外部に委託して修復してもらったが、大凡の資料は和装本又は一枚物の絵図であったのでそれらについては館内において一部技術指導を受けながら修復した。

修復においてもっとも注意を払ったのは、紙の選定や色合わせであった。中には「渡地関係文書」のように芭蕉紙や竹紙が使われているものもあった。そこで、虫食い部分を補填するための材料探しに奔走した。とくに、芭蕉紙は県内でそれを漉いている工房や個人で作っている方に協力を仰いで紙片を譲っていただいた。こうして原本となるべく近似した材料が揃ったところで、いざ修復に取りかかったところ、紙によっては吸湿性が高く収縮率が大きかったため、初めは非常に苦戦したことを覚えている。しかしながら、長い年月を経てかなり縮んでいた紙も、徐々に加湿していく間にきれいに伸び切り、その後虫食い部分を埋めて薄手の芭蕉紙あるいは典具帖紙等で裏打ちすることができた。これらの文書は元穴を使い元のこよりで綴じ戻して、最後に専用の帙を作成して作業を終えた。



リーフキャスト法
による修復



岸文庫古文書・古典籍
資料の保存状況

この他の古文書・古典籍も、手修復で行うべきものとリーフキャスト法が適用できるものを振り分けて、クリーニングと虫損補修、必要な場合には裏打ち処理等を行った。

修復処置した資料については、それぞれに処置内容や処置した日、使用した材料等を記録した紙を帙の裏面に添付するなりして記録を残すと同時に、劣化状態調査シートにも処置内容等を詳しく記し、データ入力して一連の作業を完了している。

以上の作業で、特別展で展示された資料群の処置は終了したが、実際には展示に出展されなかった古文書や絵図類も多数あったので、第二次作業としてそれらの修復及びマイクロ撮影を実施した。そして、平成15年度にはマイクロ撮影が終了し、現在はほぼ修復作業も終え、製本及び帙の作成を残すのみとなっている。

岸文庫古文書・古典籍のうち修復又は簡易補修した資料一覧

資料コード	資料タイトル	冊数	処置内容
1 T00015218B	稽古案文集	1	古い裏打ち紙を剥がし、虫損補修した後で裏打ち。角筆があるため、途中の頁は処理していない。
2 T00015248B	琉球はなし 上・下	2	虫損補修、綴じ直し
3 T00015260B	琉球年代記	1	虫損補修、伸展、綴じ直し
4 T00015338B	爛枯柴	2	虫損補修、綴じ直し
5 T00015361B	東遊艸	3	虫損補修、伸展
6 T00016695B	官板 琉球國志略	6	虫損補修
7 T00004769B	鎮西八郎為朝外傳椿説弓張月	10	虫損補修、帙作成
8 T00015193B	代官本六諭衍義大意	1	染み抜きした後で虫損補修、裏打ち、帙作成。表紙裏の反故紙はエンキャプスレーションして別置
9 T00015196B	改正六諭衍義大意 全	1	虫損補修、帙作成
10 T00015212B	王氏国場親方 僉議書	1	虫損補修、伸展、帙作成
11 T00015213B	稽古案文集	2	古い裏打ち紙を剥がして虫損補修、裏打ち。保護表紙を新たに取付け、綴じ直した。帙作成、芭蕉紙
12 T00015250B	琉球聘使録 完	1	表紙は虫損補修後裏打ち。本紙は虫損補修。
13 T00015269B	琉球入貢紀略 完	1	虫損補修、伸展、帙作成
14 T00015274B	琉球人 屋良里之子碁譜	1	虫損補修、伸展、綴じ直し、裏表紙に保護表紙を付け加えた。帙作成
15 T00015316B	道光三拾庚戌五月 波龍舟日記	1	綴じ直し、帙作成。芭蕉紙
16 T00015358B	宜湾朝保大人歌集	1	虫損補修、帙作成
17 T00015370B	雪堂燕遊艸 附 世法録琉球考	1	虫損補修、綴じ直し、帙作成
18 T00015371B	夢樓詩集	6	虫損補修、綴じ直し、古い帙は虫食い著しいため新たに帙作成
19 T00015381B	南島志	1	虫損補修。表紙と本紙の一部裏打ち。帙作成
20 T00015384B	南嶋志	3	虫損補修、綴じ直し、帙作成
21 T00015845B	三国通覽圖説 全 大尾	1	虫損補修、綴じ直し、帙作成
22 T00016675B	中山傳信録 (二友齋蔵板)	6	虫損補修、古い帙は虫食い著しいため別置き、新たに帙作成
23 T00016717B	琉球船漂着関係記録	1	虫損補修、帙作成
24 T00015215B	仰渡写	1	綴じ直し
25 T00015216B	稽古案文集	2	虫損補修、裏打ち。元の表紙はボール紙であったので取り外して渋紙の新しい表紙を取り付けた。
26 T00015220B	御財制	1	綴じ直し
27 T00015261B	琉球譚傳眞記	1	リーフキャストイング、綴じ直し
28 T00015360B	琉球使長歌 一篇	1	綴じ直し
29 T00015377B	漢詩 五絶連句	1	卷子修復
30 T00015378B	五絶 中山向朝保書	1	卷子修復
31 T00016683B	中山傳信録 (蘭園蔵板)	6	綴じ直し
32 T00004486B	繪本為朝一代記 全	1	綴じ直し、帙作成
33 T00015190B	官刻六諭衍義 全	1	伸展、綴じ直し、帙作成
34 T00015194B	六諭衍義大意 全	1	カビ除去、伸展、綴じ直し、帙作成
35 T00015195B	高島本六諭衍義大意	3	綴じ直し、帙作成
36 T00015198B	六諭衍義鈔 鈴木重義編 全	3	伸展、綴じ直し、帙作成
37 T00015211B	四十二国人物図説	1	綴じ直し、絵の具が色落ちするため、各頁に薄様紙を挟んだ。帙作成
38 T00015229B	甘藷百珍 全	1	虫損補修、綴じ直し、帙作成
39 T00015259B	琉球状 全	1	綴じ直し、帙作成
40 T00015263B	真の八十船	1	綴じ直し、帙作成
41 T00015268B	琉球人来聘容貌説 1	1	綴じ直し、帙作成
42 T00015323B	同治四年正月十一日仲弁才天堂并荒神堂御條甫二付勅	1	綴じ直し、帙作成
43 T00015324B	光緒四年戊寅六月 三嶽修甫二付支出残帳	1	綴じ直し、帙作成
44 T00015325B	中城御殿御普請二付屋敷人夫賦帳	1	綴じ直し、帙作成
45 T00015326B	中城御殿御普請二付百姓中面立帳	1	綴じ直し、帙作成
46 T00015327B	中城御殿御普請二付御石御材木持夫出帳	1	綴じ直し、帙作成
47 T00015328B	渡地村参文書控	1	綴じ直し、帙作成

48	T00015336B	弓張月春廼宵榮	48	綴じ直し
49	T00015363B	来朝琉球人みづからの別荘に 浦添王子	1	伸展、綴じ直し、帙作成
50	T00015365B	沖繩集	1	綴じ直し、帙作成
51	T00015372B	王夢樓詩鈔 乾・坤	1	綴じ直し、帙作成
52	T00015383B	五事略	2	綴じ直し、帙作成
53	T00016691B	譯註 中山傳信録	1	綴じ直し、帙作成
54	T00015201B	琉球神道記	1	リーフキャストイング
55	T00015359B	萍水奇賞 全	1	虫損補修
56	T00015251B	琉球人事記	1	リーフキャストイングにより本紙補修。保護表紙の取付け、帙作成。
57	T00015256B	琉球談 全	1	リーフキャストイングにより本紙補修。表紙は相剥ぎ後補修した。帙作成
58	T00015351B	五島列島ノ内恩納間切一帖	1	簡易補修、綴じ直し、帙作成
59	T00015718B	舌代書	1	表紙に使われていたボール紙を除去して別置。帙作成。
60	T00015720B	松田道之より藩主あての対弁書	1	元のボール紙製の表紙を除去し、渋紙で新しい表紙を取り付けた。手修復、帙作成
61	T00015785B	琉球王へ官貨を賜る義に付外務省より正院へ	1	表紙に使われていたボール紙を除去して別置。虫損補修、綴じ直し、帙作成。
62	T00015227B	長州薩州門武書簡	1	簡易補修、綴じ直し時に表紙のボール紙を取り外した。帙作成
63	T00015717B	琉球側の討論内席における口上書	1	表紙に使われていたボール紙を除去して別置。帙作成
64	T00015225B	殊域周咨録	1	リーフキャストイングにより表紙・本紙ともに補修。
65	T00004515B	繪本琉球軍記	2	表紙は虫損補修。本紙はリーフキャストイングにより補修。
66	T00015322B	波龍舟日記并午五月四日硯水日記膳部	1	一部虫損補修、綴じ直し。芭蕉紙
67	T00015340B	見聞備忘 抜粋之部	1	虫損補修、綴じ直し
68	T00015226B	異聞記	1	虫損補修、綴じ直し
69	T00016512B	六論衍義大意抄	1	虫損補修、綴じ直し
70	T00015253B	琉球國來聘記事	1	虫損補修、綴じ直し
71	T00002933B	琉球国事略 高野山事略	1	虫損補修、綴じ直し
72	T00015362B	慶賀使浦王詠歌并香川景樹	1	虫損補修、綴じ直し
73	T00015335B	繪本豊臣琉球軍記	10	表紙のみ簡易補修、綴じ直し

4 現在着手している作業について

平成17年度より、先述の琉球政府文書に関する「緊急保存措置事業」がスタートした。この中で、平成15年度及び16年度の保存状態調査の結果、「強劣化」と判定された簿冊172冊については、修復しなければ利用することができない状態にあるので早速今年度より修復を委託している。ただし、中にはすでにマイクロフィルムが存在しそれで閲覧利用できる資料群が含まれているので、実際にはこれらを除外した119冊を対象にすることにした。

一方、琉球政府文書は現在ミカン箱程の大きさの箱にぎっしり詰められているため1箱が15kg前後もあって非常に重い。このため、出納するときには持ち上げるのにも随分苦労し、また中の資料は縦置きされているため、移動するたびに箱の中で動いてすり切れ等の原因になっている。さらに、閲覧申請等で簿冊が抜き出されると、その部分に隙間ができて他の簿冊が倒れたりたわんでしまっている。

今回の緊急保存措置事業では、このような状況を改善するため現在の箱を新しい箱に切り替え、簿冊を縦置きから平置きにすることを検討している。そして、まずは重量があるために一番取り出しにくい書架上段2段の箱について、現在の箱の3分の1、あるいは2分の1の大きさの箱に入れ替える計画を立てている。具体的な箱の形状や大きさ等、幾つ

か試作品を作って実際にシュミレーションし、使い勝手を試して新しい箱の仕様を決定した。予算も限られているので全ての箱を入れ替えることはできないが、最小限必要な部分により安全な箱を導入していきたいと考えている。

最後に、今年度主に行っている修復作業について報告する。現在、修復作業は筆者を含め2名であたっている。主に対象としている資料は地籍調査図で、今年度初めに同資料全冊の概要調査を行い、枚数や劣化状況の記録を取った。これらは土地所有申請書を元にして作成されたもので、大半がトレーシングペーパーにペン書きされた原図である。中には青焼きコピー紙のものもあるが、いずれもその後この地図の情報を確認するための調査が行われてチェックマーク等の書き込みがなされている。

数にして約35,000枚にのぼるこれらの資料には、トレーシングペーパー特有の亀裂が入っているものが多く、さらにその部分にセロハンテープや製本テープが貼り付けられ、テープの粘着物質のために互いにひっついている状態にある。このままではマイクロ撮影も困難なので、まず撮影できるようにテープを剥がす処置をこの2年間で実施しようというものである。とは言え、セロハンテープの劣化は著しく、テープ本体を除去しても残った粘着物は容易に落とすことができない。限られた時間内に行う緊急措置だけに困難さは度を極めてはいるが、貴重な資料であるだけに慎重に進めていきたいと思う。

おわりに

沖縄県公文書館は、建設段階から文書の修復保存に対して非常に力点を置いている。その一つの表れとして他県に類を見ない程広い製本補修室が設けられた。ここに修復業務に必要な備品類を買いそろえ、また専任の職員を配置したわけである。

筆者は、その専門職として開館当初から当館の修復保存業務に携わってきた。これまでの10年は駆け足で過ぎ去ったような気もする反面、様々な業務を四苦八苦しながらやってきたという印象も強い。

当初、当館の修復業務は最新式の修復機械（リーフキャスティングマシン）を中心に、大量の文書を大量に修理することが目標であった。しかしながら、筆者の力不足もあると思うが、現実には修復に対峙できる時間を確保することが難しく、他に受け持った諸業務とのやりくりが一番手を焼いた。とくに開館当初は施設自体に不具合が多く、書庫の温湿度も安定せず、館内至る所で結露してカビが発生する状況であった。予算等との兼ね合いで抜本的な対策を打てなかった間は、とにかく毎日清掃に追われ、環境整備の対応ばかりしていたように思う。

また組織変更のための閲覧及び利用普及業務と修復・マイクロ撮影が統合されたことを機に、展示会や講演会等諸行事への取り組みも非常に大きなウェイトを占めた。手作りの展示会が主である当館の場合、毎晩深夜までパネル作りが続くのも普通であった。

このような混沌とした10年の中でも曲がりなりとも進められた事業が3つある。そのうちの1つが琉球政府文書の調査であり、2つめが岸文庫を中心とした古文書・古典籍資料の修復、3つめが明治から昭和初期の資料の修復保存措置である。その結果、琉球政府文書の調査では、これらから得られたデータが計画的な保存措置を図る上での基礎資料になるのはもちろんのこと、同文書群の現状を後世に伝える資料としても活用されるであろう。また、岸文庫等に含まれる琉球王朝代や戦前の資料も、大方マイクロフィルムや原本で利

用してもらえる状態になるなどの成果があがっている。

さらに、先述のとおり保存環境の整備のため毎日の温湿度データの集積から異常時の対応まで行ってきた。とりわけ、虫やカビ等に対する対策には積極的に取り組んできたつもりであるし、今年度には10年間使用してきた燻蒸釜を改良し、資料や人体、環境にまで配慮した低酸素濃度処理設備を導入することができた。かくして薬剤による弊害をなくすためのこの措置によってこれまで以上に環境管理とクリーニングにかかる作業が増えるであろうが、自然と調和しながら大切な文書を守ろうとする筆者のたつての希望は、職員の協力を支えられてようやく実を結んだように思う。

(おおわん・ゆかり)

追記：『沖縄県公文書館研究紀要』第6号（2004年3月発行）掲載の「復帰前における琉球政府文書の保存活動について」の文中で、筆者の不適切な表現がありましたので訂正してお詫びいたします。

訂正箇所：p 113上から20行目「徒勞」→「苦勞」